
七度目の転生

東荻原疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七度目の転生

【Nコード】

N9941X

【作者名】

東荻原疾風

【あらすじ】

転生、それは前世の記憶を受け継ぐこと？自分の意識が他の器に入ること？俺にはわかんねえ。けど、一番大事なのはそんなことじゃないと思う。これは作者の自己満足ですしかも不定期更新。そんなでも良い人はどうぞ。注・これは最強形だと思います。

転生ってつらい？楽しい？

「次は転生できるのかな」

俺はふと思った。

入ってのは転生する事が出来るのかもしれない。

逆に、できないかもしれない。

何を言ってるのかと思うかもしれないけど、実際そうなのだ。

だって、転生した人が帰ってくるわけじゃないし、転生したといってもおそらく、いや、絶対に誰も信じない。

つまり先ほどの転生できるかできないかは『わからない』が正解だ。ただ、俺の台詞に疑問を持つ奴もいるかもしれない。

次、ということは今までに転生したことがあるということだ。

俺は今までに六回転生した。

転生する前の始めて生まれたときは二〇〇一年の日本、一度目の転生は、おそらく戦国時代、二度目は剣と魔法の世界、三度目は太平洋戦争中の日本、四度目は錬金術の世界、五度目は光線銃やら宇宙戦争やらのSFの世界、そして六度目の今が二〇四五年の日本。

今考えると日本多いな。俺は最初の世界こそただの学生だったが、がんで死んだ直後、刀やら槍やらが飛び交うまさに乱戦の戦場に放り出された。この場合これは異世界トリップなのか？いやタイムスリップか。

そこで俺は初めて命のやり取りを見て、学んだ。そこでは剣、槍、

弓、鉄砲など他にもとにかく戦うすべを磨いて必死に生きた。けど不意打ちされて死んだ。かなり有名で『最強』とかいわれたのにな。次は剣と魔法の世界。どんな名前だったかは覚えてない。また転生したことに驚いたからな。

ここではちゃんと母から生まれた。なんか俺は生まれつき魔力が多くて家族以外から嫌われてた。後々知ったが、一番強かったときの俺の魔力は世界を壊せたらしい。

この世界では戦国時代の命のやり取りや武器のことが役立つた。刀は無かったけど、俺の技術に魔法がプラスされて『白銀の戦神』とか言われた。白銀の理由は俺の髪と装備の色から取ったらしい。そんな世界で俺は寿命で死んだ。ちなみに独身で。

三度目は戦争中の日本だったか。あの時は銃の使い方を学べてよかったな。ちなみに他の兵器（砲から戦車、戦艦まで）も使い方が分かった。最期は戦死。少年兵だったよ。

続いて錬金術の世界だが、もう転生には驚かなくなった。ああ、またかみたいな。でもどっかの金髪兄弟やゆびぱっちんで炎出す人みたいなのができて良かった。

他にも銃器が造れた。これまでの戦闘や生きる知識のおかげで『^{アルス・マグナ}黄金の錬金術師』っていわれた。アルス・マグナとかいう思想も地球にもあつたらしいけど（アルス・マグナは人間を超え神に等しい存在になる思想のことらしい）、この世界ではそれを黄金の錬金術師と呼ぶんだと。

嫁さんほしかったな。近づいてくるの金目当ての女ばっかだった。結局最期は自殺した。いろいろうるせえから。中年でした。

五度目はSF。文字通りSF。俺はどっかの星の辺境の地で生まれ（人の姿でよかった）。そこで今度は静かに死のうと思ひ、普通

に暮らしてたら、なんか来た。

宇宙の海賊とかいったな。空は空賊、山は山賊、海は海賊なんだから、宇宙賊でよくね？とか思った。まあ仕方ないんで今までの経緯と知識で撃退。

そしたらそこにどっかの星の姫様が乗っててそのままスカウト。なんか最後のほうは『英雄』とかいわれた。ちなみに光の剣（あえてビームセイバーと呼ぼう）は、かなりの切れ味というか焼き切ってたね。

光線銃も弾けてどこかの黒いマスクさんみたいな気分だった。

そこで俺は姫様と結婚。初めて愛が分かって幸せだった。ちなみに最期はヤンデレした姫様と心中。ヤンデレ好きだったから超幸せだった。理由は町で出会った子と俺が無理やり三角関係に持ち込んだ。いやーめっちゃくちゃ幸せだった。

六度目は科学が更に発達していた日本。つまり今。

俺は今十八。病院のベットで横になってる。理由は改造実験の反動で出た不治の病。そう俺は改造されたのだ。まあ、痛いこともされただけどそんなの今までにあった事に比べれば、気にも障らない。

俺は殺戮兵器の実験体として造られた。親はこのプロジェクトの責任者とその人の戦争で殺された夫。二人のの遺伝子で俺は造られた。生まれたばかりの頃からいろいろされた。記憶や意志があった俺は今度は改造実験かと軽く思っただけだった。

でもこのプロジェクトの責任者、つまり母さんの俺への愛情がやばい。痛いことされた後には、必ずごめんねといい、俺の傍にいたい、異常なまでにやさしくしてくれた。俺が父さんの代わりじゃないというところ、当たり前じゃない！あなたはあの人と私の子。だから最強で何でもできる神に等しき人間しようとしているの。あなたが嫌ならすぐにやめるし、人里はなれた場所にいく」といった。ヤンデレ最高。

けど俺は、改造を受け入れた。そこで俺は更に知識と戦闘技術、生活スキルを身につけた。そこで改造も完成したけど、母さんが戦場に出すために造ったんじゃないといい、今は母と二人暮らし。なんでも殺戮兵器は、他の奴らを納得させるための名目だったらしい。一応何回かは戦場に行った。母さんの立つ瀬ないし。

そして今、不治の病でベットの上。今、母さんが血眼になって直す方法を見つけている。ちなみに母さんは見た目二十代の美人。実際は三十九。にしても二十一で俺の改造始めるあたり天才だよな。俺と母さんは親子であり恋人であり夫婦だ。何故かと言うと完全にヤンだ母さんが十五のとき手を出してきたから。俺はそれを受け入れた。まあ好きだったし良いかなと。世間には当然ふせてある。

改造された俺はなんとなく死期がわかる。母さんと過ごした五年（改造は十三歳で終わった）は幸せだったし（いろんな意味で）、もういいやという思いだ。

「次は転生できるのかな」

転生ってつらい？楽しい？（後書き）

いやー息抜きに投稿してしまった。

どうも東荻原疾風です。

正体不明も予定を繰り上げ、近々投稿再開しようと思います。

あんた、誰？

なんか俺の前におっさんがいる。

どういうことだ、俺は夢の中であってもそんな趣味は無い。
これは夢なのに、リアルすぎるぞおっさん。

「だれがおっさんじゃ」

「お前だ、お前」

「わしは神じゃぞ」

「そっすか、どうでもいいんで、出てってください。俺はゆっくり寝たいんだ」

だからさっさと出てけ糞爺。

「誰が糞爺じゃ」

心読むなよ。

「わしは神だといっているだろう。ところでこんなことでは驚かんのか」

当たり前だ伊達に七回の人生と六回の転生を味わってねえ。

「そうか、そうか」

何だよ気持ち悪いなあ。俺はもう死んだんだから寝かせてくれよ。

「なんと！自分が死んでると分かるのか！」

まあな、それくらい分かる。

「ならば早い。おぬしには、もう一度転生してもらおう」

またか、それが最期なんだな？俺は転生を続けてもう精神がぐたぐたなんだ。

「最後かは分からん、じゃが今回の転生はわしが三つまでおぬしの願いを特典としてつけてやるわ」

本当か、なら

「一つ目は、俺が今まで経験した世界の技、武器、魔法、錬金術、超科学、その他すべてを創造して使えるようにしろ。」

「すべてか、おぬし次の世界で神になる気か。それと何故突然喋りだしたんじゃ？」

「二つ目は」

「無視か」

「『ザ・ヒーロー』
英雄にて主人公』を使えるようにしてほしい」

「ざ・ひーろー？なんじゃそれは」

「これは、俺がすべての世界で考えた末のほしい能力だ。これは、簡単に言えば英雄としての主人公としての、信念、不屈、勇気、この三つの魂がある限り自分の力を際限なく高め、どんな無理でも、不可能でも無理やり可能にすることができる力だ」

「無敵じゃな。そんなのわしでも勝てんぞ」

「その通り。この力は三つの魂さえ燃やせば、やろうとすれば人を生き返らせることも、神を奴隷にすることも文字通りなんでもできる。逆にこの三つの魂が揺らげば効果は小さくなるし、絶対折れない剣を削っても、脆くなる」

「それなりの弱点はあるということか、それで三つ目は？」

「最後は、たったの五分で良いから、文字通りすべてを、未来も神も異世界すべてさえも見通す眼がほしい」

「分かった。最後のについては身体的にも精神的にも成長することに持続時間が長くなるようにしておいた。後最後のもう一つ。一度完全に時間いっぱい使った場合、最低でも三倍の時間をかけなければ完全回復できぬからな、時間が少なくともいいなら途中で回復を止めて使うのもありじゃ」

「了解。ところで回復じゃなくてチャージでいいか。そっちのほうがいいかッコイイ」

「好きにしる。それでは七度目の転生、逝ってこい」

あなた、誰？（後書き）

これ、書いてて思ったけどかなりチートですね。
正体不明は一週間に一度くらいで更新したいと思います。

王子（俺）の誕生

「おぎやああああ！」

はい、ただいま生まれました。

「姫様、生まれましたよ。元気な男の子です」

「はあ、なんてかわいらしいのでしょうか」

「お、生まれたか」

「はい、あなた。名前は決めましたか？」

名前、とても気になるな。かっこいいのにしてくれよ父さん（たぶん）。

「名前は、ヴァンだ」

「ヴァン・・・良い名ですね」

よかったーそれなりの名前で。

ところでさつき、姫様って言ってたってことは、俺は王子か！

でも、俺って確か、神から三つの力をもらったんだよな。そんな力もあり、更に王子。暗殺される要素や恨まれる要素が盛りだくさんだな。

俺が転生者ってことは、早めに家族に言おうかな。何かされても殺せばいいし。

けど今は身体が睡眠を欲してるから、寝るかな。

王子（俺）の誕生（後書き）

短いすね。

しかしこの小説はこんな感じで書いていきます。

執筆スピードは多少速いかもしれませんが。

それでは次回で。

口が達者な五歳児

ヴァンです。

あれから五年がたち、五歳になりました。ただいま俺は一つ年下の妹を抱え、家族と信頼できる人を集めて、昔話をしています。

昔話って言っても俺の転生前のことについてだけ。

ここで、家族紹介でもしようと思う。

アーヴアス・アレイザー

父さんで、国王だ。

容姿は、髪が銀髪の、背が高い、イケメン。まあ、ご想像にお任せするけど。

性格は温厚で、母さんに尻にしかれてる。実力は歩く戦車だ。

イリース・アレイザー

母さんで王妃。

容姿は、金髪碧眼。もう綺麗過ぎて、国の男共は目が釘付け。けど男に関しては、俺と父さんと兄さんにしか興味が無いらしい。性格は慈悲深いのが、キれると、悪魔ですら跪かせることができる（気だけ）。

アッシュ・アレイザー

兄さんで第一王子。

容姿は母さんの金髪に、王子って感じの整った顔立ち。

性格は母さんを完全に受け継いでいる。歳は十歳で婚約者のマリィさんにべた惚れ。

ミリア・アレイザー

姉さんで第一王女。歳は一つ上の六。

容姿は父さんの銀髪を肩で切りそろえて、鋭い眼が特徴。

性格はまあ多少男勝りなところがあるけどいい人だ。ちなみにブラコン（俺に対して）。

リリア・アレイザー

妹で第二王女。歳は四。

容姿は腰まで伸ばした金髪に、幼いけど天使のような顔でもう俺はメロメロです。

性格はやさしく明るい。しかも俺のことを第一に考えてくれるといふから最高じゃないか。

最後に俺、ヴァン・アレイザー

第二王子をやっている。

容姿は銀髪に眠たそうな眼が特徴の顔。時々、鋭い目になる。性格は、まあひどいほどこころ変わる。

今昔話をしているといったが、実は二年位前に、すべて話したのだ。そしたらみんな簡単に許容してくれた。さすがに家族以外は俺が信用した奴にしか話してないが。力のことを父さんに話したら、それがもれば、おそらく狙われるから、お前のことは不本意だが『無能王子』として公表するといわれた。

何の力も継がなかった無能王子。そうすれば狙われないだろうといふことらしい。

まあ俺はそのほうがいいけどね。

さてそろそろ話も終わるな。そんじゃまた今度。

口が達者な五歳児（後書き）

今回も短いです。

次回はおそらく更に飛びます。

次は説明の回ですね。

それでは

ひきこもり王子

あれから十年のときが流れた。

俺は今十五歳で、無能王子を今日も元気にやっている。

とまあ、前置きはこれくらいにして、今俺は何をしているかという
と、本当にダメ王子をやってる。

何故本当にだめになったかというと、まあ、簡単に引き籠もりやっ
ているのだ。

引き籠もった理由としては、兄妹と専属メイド、そしてわが国の最
強の部隊、『ヴァルキュリア戦女神隊』の面々が学校いけと煩いんだよ。

『ヴァルキュリア戦女神隊』の説明を先にしておく、あれは、女性だけで構成さ
れた部隊だ。ちなみに隊長は『六聖』といわれる、最強の一人アミ
さん、二十歳。まあこの隊長と副隊長、そして『ヴァルキュリア戦女神隊』のエー
ス兼専属メイドのアリア（同い年）が学校いけというんだよ。兄妹
も煩いけど特にこいつらは煩い。

「はあ、今更学校にいつでも無能王子が来たとかで、いじめになる
だろ。逆に力を使えば更にめんどくさくなる」

本当に嫌になるぜ。

「ヴァン様、朝食の準備ができました」

そんなことを考えてるとメイドさんが呼びに来た。アリアだ。

「わかった。ちなみに今日は誰がいる」

「王、王妃様、姫様方、それと、『六聖』のアミ隊長とユリ様です」

「了解。それと、周りに人がいないときは敬語じゃなくていいのに」

「私がヴァン様を呼び捨てにするときは、『二人きり』のときだけです。今は二人きりではありません」

「そうかい。それにしてもユリとアミさんが、めんどくさそうだな」

アミさんはさっき言ったように『ヴァルキユリア戦女神隊』の隊長だ。ユリってのは俺の一つしたの最年少で『六聖』になった女の子だ。ちなみにユリは学校にいつてはいるが、不登校で、ほとんど城ですごしている。

「みんなを待たせるのも悪いし、いくか」

俺は、ベッドから立ち上がると歩き始めた。

俺たち家族は基本的に晴れの日は夕食以外、外で食べる。まあその方が気持ちいいし良いんだけど。

城の中庭にいくと、俺以外そろっていた。俺が席に着くと食事がメイドさんたちによって運ばれてきた。それぞれの専属のメイドさんが運んでくれるため、俺のところにはアリアが運んできた。『六聖』の二人には普通のメイドさんだけだ。すべて運ばれたところで、父さんが挨拶をし、朝食が始まった。

みんな喋りながら食べてるけど俺は基本的に自分から喋らないため淡々と食べている。これでも十歳くらいまで普通に喋ってたんだけど、みんなが学校に行けといい始めたあたりから少々無口になってしまった話を振られればちゃんと答えるけど。

ここでみんながいけと言ってる学校について説明しよう。

学校ってのは正式なやつが基本的に一つの国に一つある。個人でやってたりするのはたくさんあるだろうけど、正式なのは一つだ。その学校の名前は国によって違うけど俺の国の学校は『アズラス魔法学園』。魔法ってついてるけど別に魔法だけやってるわけじゃない。単純に魔法の人口が高いからそうついてるだけで。学年は一年から六年まであり、更に上を目指したい人のために研究一年と二年がある。ここには十三歳で入学するため、地球で言えば中学と高校が合体した感じだ。そこにもっと勉強したい人のために短大がついたと思ってくれるとわかりやすい。余談だがこの世界では十六歳が成人だから学園の四年生は進級と成人の祝いで酒を飲みまくったりする。

そしてこの学園には様々な学科がある。

まず、『魔法学科』、『騎士学科』、『武術学科』、『技術学科』、『情報学科』の五つがあり、そこから更に魔法学科なら『火属性科』、『水属性科』、『騎士学科』なら『騎士科』、『剣士科』などに派生していく。

授業は基本六時間で一〜四時間が普通の共通授業、五、六時間が専攻学科の授業がある。ちなみに一度にいろんな学科は専攻できないけど同じ学科の中なら好きなだけ選べる。けどほとんどが二つくらいしか受けない。理由としては単位が取れないからと他のにてを出しすぎれば自分が一番受けたいものがおろそかになってしまっからだ。

登下校に関しては九割寮からの登校で一割が実家からかどっかにとった家からの登校だ。俺の兄弟たちは家からの登校だ。ちなみに兄さんはもう卒業していて今は父さんの命令で魔物の討伐にいらしてるため家にいない。しかもその近くにある皆で少しの間過ごすらしいから少し寂しいぜ。魔物ってのはそのまんまで異形の怪物だ。強

さはE〜XXまである。

俺は当然学校にはいつてない。だからみんないけって言うてるんだけど。

そんなことを考えながら飯を食べてると、妹に話しかけられた。

「兄様、いい加減に学校に通ったらどうですか？私はとても寂しいです」

リリアの上目づかい攻撃！ヴァンにクリティカルヒット！
だがここで負けるわけにはいかない！

「そうよ、今からでも遅くないわ」

母さんのお願いのまなざし！ヴァンに追加ダメージ！
くそ、その眼は反則だぞ。

「そうだな、私もきてほしい」

姉さんの珍しいお願い！ヴァンの心は限界だ！
いつもは横暴なくせにこういうときだけそんな風に言うな！

「ヴァン様、私からもお願いします。私もヴァン様と一緒に学校いきたいです」

アリアの懇願！ヴァンは罪悪感のバッドステータスを得た！
アリアは俺の専属だから俺のために学校に行かずに友達もいない。
でも学校で習うことはすべてメイド修行の一環として受けたから知識については大丈夫なところが救いだな。

「ヴァン、私も一緒にいきたいです」

ロリっ娘ユリの援護射撃！ヴァンの心は崩壊し始めた！
くそ、ここまできわれば仕方がないか。

「そうですね、ヴァン様、貴方様のような人が学校に行けば私が四六時中護衛しますのに」

アミさんは無表情で鼻血をたらし、ハアハアしながら言った！ヴァンは貞操の危機を感じた！

やはり学校に行くのはやめようこの人、たまに臨時教師するらしいし。

「しかし、さすがにいけないと困るぞ」

父さんの妙の説得力のある声！ヴァンは少し考えた！
うーん父さんがいうと行かなきゃならないきがするな。

「みんなの言うこともわかるけどいまさら『無能王子』が言ったところで良い、いじめ対象が来たって事になるだけだ。逆に力を使えば後々面倒になるだけだ」

「確かにそうかもしれないが、名を偽ればよかるう」

「いまどきそんなの無駄だよ父さん。やろうと思えば俺のことなんてすぐにばれる」

そのときこんな声が聞こえた。

『おぬしはそれでいいのか？』

この声は…くそ、あの爺か。これでいいかって？よくねえよ。もっと楽しみたいにきまつてるだろ。けど下手に動けば大切な人たちが危険にさらされる。

『わしが何のためにおぬしに力を与えたのか考えてみる』

そうかい、確かにそうだな。それにもし力のことかばれても勝てばいいんだしな。
わかったよ爺。

『礼には及ばん』

その代わり近々天界にいつてお前をシめるわ。

『……………』

「わかったよ、明日からでも明後日からでも学校にいつてやるよ」
七度目の転生、楽しんでやろうじゃねえか。

ひきこもり王子（後書き）

やっと話がスタート。

感想などお待ちしております。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9941x/>

七度目の転生

2011年11月16日20時54分発行